第50号

発効日：平成21年9月16日
発行者：医学部広報委員会
印　刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

1面：医学部ウォーカー創刊50回の記念に寄せて
2面：弘前医学会総会
3面：AO入試スクーリングが開催される
4面：解剖体慰霊祭
5面：科学研究費採択状況
6面：「ヒロダイ・いきいき元気塾」活動報告

題字　弘前大学長　遠藤正彦氏筆

医学部ウォーカー 創刊50回の記念に寄せて

棟方昭博（弘前大学名誉教授）

先日、医学研究科広報委員長の上野伸哉教授より「医学部ウォーカー五十号」記念号への寄稿の依頼がありました。創刊時（正しくは発行時）の広報委員長でありタイトルの発案者であることが指名の理由とのことですが、退職時に多くの資料を廃棄したため、思い出す点はタイトルの命名についての記憶が残っているのみであり、送って頂いた創刊号を見ながら当時を振り返ってみたいと思います。

平成八年に遠藤正彦現学長が医学部長に就任されてから多くの改革が進みましたが、その一つが広報紙発行です。教授会の討議内容は公表されていましたが、多くは結果のみでプロセス等の理解には不十分であり、教職員以外の構成員である教職員、大学院生、学生さらには地域社会、特に地域医療を担当している関連病院への情報の発信を目的として委員会が立ち上げられました。委員の構成は新川秀一教授、中根明夫教授、現医学部長の佐藤敬教授と私でした。

平成九年一月より委員会を繰り返しながら、発行のコンセプト、広報内容等を討議の結果、教授会（当時は保健学科が立ち上がる前でしたので、現在の医学科のみが対象）や各種委員会の決定事項、人事異動、各種学会での受賞者の紹介など医学部の流れの主な点を内容とし、大学学報や病院広報紙との記事の重複を避けることとしました。発行回数については少ない内容で数多く発行した方が良いとの意見もありましたが、原稿集めなど各委員が多忙な仕事の合間に行う時間的余裕を考え年四回の季刊とすることにしました。発行のコンセプトは「学部公開と改革の方向性の明示」としました。タイトルは医学部新聞とか固いものもありましたが、当時東京ウォーカーとかナウい「カタカナ」が流行しており、最終的には「医学部ウォーカー」と決まり、題字は遠藤学長に筆をお願いしました。現在も発行当時の方向で数多く発行が回数を重ねている事は、発行に係った者として嬉しく思っております。

ところで、「医学部ウォーカー」が発行されて十数年になりますが、この間に医学部の組織が、医学科と保健学科との二本立てになっており、広報の対象が医学科のみで良いのか検討が必要ではないでしょうか。「名」は「体」を表すと言いますが、「医学部ウォーカー」の内容は「医学科ウォーカー」になっているような気がします。保健学科が保健学部に昇格した時点では現在のままでよいのでしょうが…。

最後になりますが、情報の重要性について述べます。情報開示の重要性は論を待たないところであり、最近では政府与党が両院議員総会をマスコミにオープンしないとの方針がマスコミを賑わせましたが、相変わらず「知らしめるべからず」の封建時代の名残が残っているのが日本の現状かと思います。最近読んだ塩野七生著の「ローマ人の物語」では、かの有名なユリウス・カイサルがローマの執政官就任時に元老院で行われた議事・討議・決議の全てを公開する目的で、会議の翌日にフォロ・ロマーノに「アクタ・セナートゥス」（元老院議事報）掲示したのが新聞の始まりであったと言われていますが、二千年もの昔でも情報を開示することにより政治改革が進んだとのことです。古来より情報の開示は重要であると思います。

（H21・7・31記）

ホリスター先生に名誉博士号

医学研究科長　佐藤　敬

ポール・ホリスター先生には、平成十五年から本学医学部医学科の医学英語教育を担当して頂いており、また、平成十六年から設置された医学部メディカル・イングリッシュ・センターにおいて、研究論文や国際学会の講演原稿などの英文校正に協力頂いてきました。また、ホリスター先生は、自ら医学英語の教材を開発され、本学のみならず、我が国の医学英語教育全体にも貢献して来られました。更には、三沢米軍病院における本学学生のエクスターン研修制度の立ち上げにもご尽力頂き、現在も毎年、数名の学生が同病院での実習を行っています。

これら長年にわたるホリスター先生の教育、研究に対する多大な貢献に対して、本年六月五日に名誉博士号授与式と祝賀会が行われました。また、今回の名誉博士号は本学の六十周年記念事業の一環でもあり、ホリスター先生と奥様には翌日の弘前大学六十周年記念式典にも出席頂きました。

ホリスター先生は、昭和四十三（一九六八）年に米国ロチェスター大学医学部を卒業後、米軍医師として来日し、一九九五年に三沢米空軍病院勤務を最後に退職されました。以来、先生は三沢にお住いで、毎週のように弘前まで講義に通って頂いています。ホリスター先生のこれまでのご尽力に改めて深甚なる感謝の意を表するとともに、今後もますますお元気で、本学の教育、研究にご協力頂きますようお願いする次第です。

平成22年度からの卒後臨床研修制度変更点

卒後臨床研修センター長　加藤博之

新聞等の報道により既にご存知のように、平成二十二年度から卒後臨床研修制度が大きく変更される。卒後臨床研修は平成十六年度より義務化されて丸五年が経過し、それなりに定着した感があったが、一方で地域医療の崩壊、医師不足、研修医の都市部への集中などの問題点も指摘されていた。そこで昨年九月から厚生労働、文部科学両大臣のもとに設置された有識者会議「臨床研修のあり方等に関する検討会」で対応策が協議されていた。今春、同検討会により意見が取りまとめられ、医道審議会医師分科会医師臨床研修部会による審議を経て、四月二十八日付けで厚生労働省省令が一部改正されたことにより、来年度から研修制度が大幅に変更されることになった。なお研修期間については一時期「一年に短縮される」かのような報道が一部にあったが、従来どおり二年間であり、変更はない。新制度の要点は以下に示す通りである。

（一）研修科目について

内科六ヶ月（一年次）、救急三ヶ月（一年次）、地域医療一ヶ月（原則として二年次）は従来通り「必修科目」とされたが、一方で産婦人科、小児科、精神科、外科、麻酔科は「選択必修科目」とされ、このうち二科目を選んで研修することになった（ただし研修期間や研修時期についての定めはない）。このことにより二年次の「選択科目」の期間を大幅に延長することが可能となり、研修医の幅広いニーズに応えることができるようになった。本学の場合は、二年次「選択科目」の期間を最長十一ヶ月まで取れるように変更した（プログラムAの場合）。

（次ページへ続く）

（前ページより）

（二）研修到達目標について

従来から二年間で修得・経験すべき項目として延べ二百数十項目に及ぶ手技、症状、病態、疾患が、厚生労働省により「研修到達目標」として定められていたが、これについては平成二十二年度も変更はない。従って、例えば「分娩を経験すること」、「統合失調症の入院症例についてレポートを作成すること」などの、研修医としての義務は、引き続き課されることになる。この点は現場の研修プログラム責任者たちに、少なからぬ混乱を呼んだ。なぜなら、選択必修科目として「五科目中二科目選択」となったため、たとえば産婦人科や精神科を選択しない研修医が存在しうるわけであるが、〝ではどうやって分娩や統合失調症の入院症例の経験を積むのか〟というわけである。この問題に対する厚生労働省の見解は明確なものはなく、いわば〝各病院の工夫〟に任された形になっている。全国的に見れば、各病院の対応はまちまちであろうが、本学附属病院の場合には二年次終わり頃に、選択科目の一部として「仕上げ選択」という期間を設け、万一「研修到達目標」の中で達成できていない項目があっても、到達できるように工夫した。

（三）研修医の定員について

研修医の偏在を是正する〝適正配置〟の観点から、今回の改正には都道府県ごとに、また必要な場合は各研修病院ごとに定員の上限を決めることが盛り込まれた。定員を決定するにあたっては、前年度の採用実績、人口あたりの医師数、面積あたりの医師数、医師派遣機能などのいくつかの指標を用い、複雑な計算式により算出する。これにより本県の場合は県あたりの定員は従来より増える見込みだが、本学附属病院の定員は不変または削減となる可能性が否定できず、今後の推移を見守る必要がある。

今年度は制度の変更に伴いマッチングの日程も約一ヶ月後ろ倒しにされた。現六年生諸君は落ち着かない日々を過ごしていると思われるが、制度の変更点と趣旨を充分把握し、熟慮した上で、進路を決定されることを望むものである。

医学研究科長
医学部長寄稿

医学生と若い医師へのエール

医学研究科長・医学部長　佐藤　敬

ここ数年、女性医師が活躍しやすい環境の整備を望む声が多方面で高まっていますが、医療崩壊とも表現される現状の中ではじめて強く言われるようになったことには、戸惑いを感じつつも、大いに重要なことと思っています。

そのような中で、最近、青森県医師会を中心とした、女性医師と女子医学生の懇談会等の企画に何度か出席する機会を得ました。もう少し男性参加者が多くても良いのではないかというのが私の第一の問題意識でした。以下にも述べるように、本当は女性医師に限定された問題ではないと思えるからです。第二には、この問題に対する取組みの難しさを改めて意識していきます。

医学部キャンパス内における保育施設の整備は極めて大きなことであったのは間違いなく、実際に有効に機能しており、またその意義はますます大きくなりつつあります。しかし、私たちは、結婚や出産、子育てなど、重要な課題を抱えた若い医師（女性に限らない）のキャリア形成全体のために心を砕く必要があると思っています。これには、休暇やワークシェアリングなどを保障する制度の整備はもちろんのこと、それだけではなく、個々の事情に配慮したきめ細かな対応が本当は必要です。大学病院をはじめ、この時期に勤務することの多い病院の医師数に余裕が無ければ、これを十分果すことは難しく、やはりこの問題の本質も、その辺りにあるのは間違いない事実です。毎日のように深夜に及ぶ勤務が続き、当直の翌日も普通に仕事をしなければならないような状況があるとしたら、女性に限らず男性医師でさえ、家庭的務めを十分に果すのは難しいことでしょう。私の先輩のある家庭の昔話として、医師であるお父さんは、〝時々家を訪問して来るおじさん〟だと子供に思われていたということを以前聞きました。子供の誤解は別として、現在でも、そのような状況は間違いなくあると思います。これまで多くの医師の献身的努力によって支えられてきた地域の医療の現状が根本的に変わらない限り、女性医師に関する問題の解決もないと思えます。医師の世界も他業種並みに、出産や育児などのための休暇が男女の別なく、普通に取れるような状況にあるべきことは、言を待ちません。

一方で、若い医師たちには、さまざまな困難の中にあっても、それをできるだけ克服し、それぞれの大きな夢と可能性に果敢に挑戦して欲しいと願っています。そうすべきだとも思っています。それは、自己実現を果すとともに社会の期待に応えることでもあります。医学者としての道を歩むことには、これ以外にも多くの困難があると思いますが、皆さんには、それを乗り越える力があると信じています。社会環境の整備が十分果される日はいまだ遠いと危惧される中にあって、医学生と若い医師の皆さんが理想を捨てずに健闘して下さることを心から祈ります。

第93回

弘前医学会総会

弘前医学会編集幹事　鬼島　宏
（病理生命科学講座　教授）

第九十三回弘前医学会総会が、田中正彦総会長（北五医師会長）の下で、平成二十一年七月四日（土）にプラザマリュウ五所川原（五所川原市）において開催された。盛夏の日にもかかわらず、多数の参加者があり、盛会であった。

今回の総会は、一般演題が十題あり、基礎医学的な発表内容から、臨床医学的な研究報告、さらには臨床症例の詳細な解析と、興味深い演題が重なり、演題発表後の質疑応答も活発に行われた。一般演題の終了後に、昨年度「弘前医学」に掲載された中から選出された優秀論文賞（長谷川一志先生）、ならびに今回の総会一般演題から選出された優秀発表賞（大矢史恵先生）の表彰式が執り行われた。

引き続き、法医学講座黒田直人教授による特別講演「西部戦線異状なし　―死因究明の現状をめぐって―」が行われた。黒田教授のご意向もあり、この特別講演では一般の方にも聴講が呼びかけられた。このため講演内容も、「なぜ死因究明が必要なのか」といった基礎的な内容から始まり、数々の事項が明快に説明がなされて、きわめて充実した講演であった。会場は満席で、本総会出席者（記帳数）八十三名のうち二十三名が一般の方であり、死因究明に関する関心の高さがうかがわれた。

末筆ながら、今回の弘前医学会総会が成功裡に運営されたのは、田中正彦総会長をはじめとする北五医師会の先生方のご努力の賜物と思われます。この場を借りまして、会員一同感謝を申し上げます。

なお、今後の弘前医学会は、第百四十七回例会が平成二十二年一月二十九日（金）に弘前大学医学部コミュニケーションセンター、第九十四回総会が青森市医師会 齊藤 勝会長の下で平成二十二年六月十九日（土）に青森市にて開催が予定されている。今後も、多数の皆さんの参加をお待ちしております。

平成20年度弘前医学会優秀論文賞を受賞して

青森労災病院　循環器呼吸器内科　長谷川　一志

この度は平成二十年度弘前医学会優秀論文賞を賜りまして光栄に存じます。

今回受賞しました論文は、内皮依存性過分極因子（ＥＤＨＦ）をテーマに、冠動脈疾患とは関連の深い高血圧症がＥＤＨＦの反応に及ぼす影響を検討しております。ＥＤＨＦとは血管内皮由来の物質で、血管平滑筋を過分極させることにより血管拡張を引き起こすと考えられております。ＥＤＨＦによる反応は一酸化酸素やプロスタサイクリンとは独立しており、カルシウム活性化カリウムチャネルを介していると多数報告されております。一方でＥＤＨＦの反応は高血圧状態で障害されていることが報告されております。今回我々は慢性高血圧症における冠動脈に対するＥＤＨＦの反応とカルシウム活性化カリウムチャネルに対する影響について、高血圧自然発症ラット（ＳＨＲ）と正常血圧ラット（ＷＫＹ）のランゲンドルフ灌流心を用いて検討しております。結果としてブラジキニンを用いたＥＤＨＦの反応はＳＨＲにて減弱しておりました。また非特異的カルシウム活性化カリウムチャネル阻害薬では、ＥＤＨＦの反応は抑制され、一方でintermediate conductance カルシウム活性化カリウムチャネル作動薬におけるＥＤＨＦの反応はＳＨＲで減弱しておりました。また高血圧早期ではＥＤＨＦの反応はＳＨＲとＷＫＹは同等の反応を示しました。以上のことから慢性高血圧状態の冠動脈微小循環におけるＥＤＨＦの反応はintermediate conductance カルシウム活性化カリウムチャネルの異常を介して障害されていることが示唆されました。以上が論文の要旨です。

医学部を卒業し、三年間の臨床を経験した後に大学院に入学し、四年間の研究

（次ページへ続く）

（前ページより）

生活に入りました。その当時諸先輩たちによってランゲンドルフのシステムが確立されつつありましたので比較的スムーズに研究の進め方を教えて頂きました。しかし最初は研究テーマが決まらず悩む時期もありました。一年半程経過し、よ

うやくＥＤＨＦをテーマに研究を進めることに決まったときは、期待に胸が高鳴ったことを今回の受賞を契機に思い出しました。現在臨床中心で研究を離れておりますが、機会があれば臨床だけではなく研究にも従事していきたいと思います。

第93回弘前医学会総会 優秀発表賞を受賞して

附属病院循環器内科・呼吸器内科・腎臓内科
大矢史恵

私は、附属病院循環器内科・呼吸器内科・腎臓内科（現 三沢市立三沢病院内科臨床研修医）の大矢史恵と申します。

今回はこのような賞を頂き、大変光栄に感じると共に数ある先生方の素晴らしい発表の中で選んで頂いた事に正直大変驚いております。

私の発表「大動脈内浮遊性血栓により急性心筋梗塞を発症した一例」ですが、これは昨年ちょうど私が弘前大学医学部附属病院循環器科で研修していた際に経験した症例です。今回の症例は、中年女性で冠危険因子の少ない（喫煙のみ）に発生した心筋梗塞の一例です。心筋梗塞の原因としては、冠動脈内に形成されたプラークの破綻によるものが有名ですが、今回の症例のように上行大動脈に形成された強固な血栓が冠動脈入口部に嵌頓し、急性心筋梗塞を発症するというのは機序として非常に珍しいと言えます。また、同様の症例は若い女性の突然死という形で発見される事が多く、今回のような生存例の経験は大変貴重であったと考えます。また、症例数に関しても論文での発表例を数えると世界に十数例程度しかないという事で、この貴重な経験を是非にしないといけないと考え今回の発表に至りました。今回の症例を経験し、自分でいろいろな事を考え、仮説を作り検証する事の楽しさ、また難しさを実感した気がします。今回、大動脈内浮遊性血栓の形成機序につき考察を行いましたが、今後性別との関連や血液学的な問題点などさらに詳しい検討が必要だと考えています。

なお、この症例に関しては現在論文作成に向け執筆中です。まだ大学院一年目の自分にとって、学会や研究会での発表や論文の作成は初めて体験する事ばかりですが、教授を初めとする先輩先生方の指導により、なんとか形になる事ができそうです。

今回はこの様な大変貴重な機会を与えて下さり、誠にありがとうございました。これに満足せず、これからも臨床や研究さまざまな分野で努力を続け、頑張っていきたいと思います。

AO入試スクーリングが開催される

—県内高等学校進路指導担当教諭との懇談会も含めて—

医学科入試専門委員長（感染生体防衛学講座　教授）
中根明夫

昨年度に引き続き、医師不足に関連し医学部医学科の三度の入学定員増が準備される中、入試関連の行事が粛々と進んでいます。平成二十一年度の入試から新たにアドミッション・オフィス入試（ＡＯ入試）が行われ、四十名が入学したことは前号で報告しましたが、本年度もまたＡＯ入試に先立ち、受験生に弘前大学医学部医学科について理解していただく目的で、二回のスクーリングを実施しました。第一回目は五月十六日（土）午後一時から四時まで、臨床大講義室で行いました。高校三年生を中心に生徒百名、保護者・高校教諭二十三名の計百二十三名が参加しました。講義は三コマ組みました。最初に佐藤 敬医学部長から講義一「弘前大学医学部の姿勢と将来性」が行われ、弘前大学医学部の概要と医学部学生・医師・医学研究者として求められる人間像についてお話いただきました。入試専門委員長による講義二「弘前大学ＡＯ入試選抜の概要及び弘前大学医学部医学科の教育の概要」ではＡＯ入試の資格、選抜方法、医学教育六年間について話しました。さらに加藤博之卒後研修委員長による講義三「弘前大学医学部の卒前卒後教育と将来の展望」では、卒前臨床実習と医学部附属病院での卒後臨床研修が紹介されました。参加者はいずれの講義も熱心に聴き入っていました。質疑応答の後、希望者に附属病院外来棟の見学を行いました。

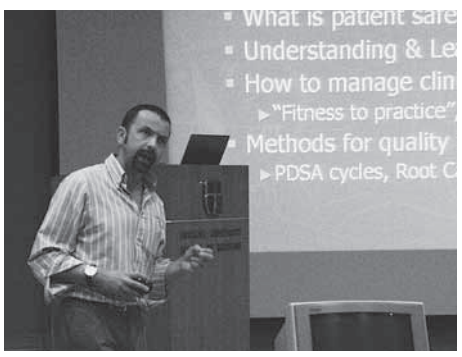
第二回目のスクーリングは八月八日（土）に行われました。前日にオープンキャンパスが開催されたためか、今回は参加者が少なく生徒二十三名、保護者・高校教諭六名の計二十九名でした。今回の講義は四コマ組まれました。佐藤 敬医学部長から講義一「弘前大学医学部の姿勢と将来性」、入試専門委員長による講義二「弘前大学ＡＯ入試選抜の概要」、そして奥村 謙学務委員長による講義三「弘前大学医学部医学科の教育」と順次行われ、最後の講義は遠藤正彦学長による「医師に期待されるもの―地域医療から文化勲章まで―」と題して講義をしていただきました。医師として期待される例として「赤ひげ先生」を挙げ、将来の医療人としての期待を熱く語られました。また、研究面では、弘前大学医学部元教授であり文化勲章受賞者の高橋信次先生をはじめ、弘前大学医学部で活躍・業績を挙げられた先生方の紹介もありました。講義終了後、質疑応答が行われ、本年度のＡＯ入試スクーリングの日程が終了し、ＡＯ入試本番への準備が始まりました。

六月十八日（木）、ＡＯ入試に関する意見交換が主体となることを見越し、例年より一ヶ月早く、青森グランドホテルにおいて、「青森県内高等学校進路指導担当教諭との懇談会」が開催されました。この懇談会も今年で五回目となりました。弘前大学側から、佐藤医学部長、入試専門委員長、神入試課長をはじめ六名、県内高校側は十六校の進路指導担当の先生方が出席しました。佐藤医学部長のあいさつの後、入試専門委員長から平成二十一年度の入試結果と平成二十二年度の入試の変更点について説明を行いました。その後、大学と高校間の質疑応答や意見交換が行われ、二時間の懇談会が終了しました。特に二十一年度から実施されたＡＯ入試に関し受験生はもちろん、保護者および高校関係者がきわめて高い関心を寄せており、実施する側としては気を引き締めて準備をしなければいけないと考えています。本年度もすでに三年次学士編入学の選抜も始まっており、先生方には各選抜の運営と実施にご理解とご協力をお願いする次第です。

最後に、二回のスクーリングの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方および学務グループに深く感謝いたします。

平成21年度大学院教育FD

麻酔科学講座　教授
廣田和美



平成二十一年七月十五日（水）十六時三十分～十八時三十分に、医学部コミュニケーションセンター二階ホールで、学務委員会主催のＦＤ講演会が開催されました。今回は、以前より麻酔科学講座と交流があり当医学部で医学教育の講演を行ったことがあるスコットランド・グラスゴー大学医学部の Evans 先生からのご紹介で、スコットランド・アバディーン大学医学部麻酔科学講座の Alan Thomson 先生と総合診療部の Jennifer Cleland 先生御夫妻をお招きして、御講演を賜った。当講座に関係する外部講師という事で、僭越ながら私が司会を承るとともに、この記事の執筆も行う事となりました。

さて、講演会にはお忙しい中にもかかわらず四十名もの出席者があり、活発な討論が行われ、有意義な講演会となりました。Thomson 先生からは「Teaching & Learning Professional Practice in Undergraduate Medical Education」という題目で講演があり、英国での医学部学生教育の方法について紹介があり、Cleland 先生からは「Workplace Based Assessment of Medical Students and Trainee Doctors」という題名で、卒後研修医の教育方法、特に個々の研修医の評価法及びそのフィードバックについて紹介がありました。英国ではシステマティックに教育及び評価がなされていることがわかりましたが、日本と同様に医師側の過重労働の合間を縫っての細かい評価はやはり時間的に難しい事や研修医への評価の伝え方、特に悪い評価を如何に伝えるかは微妙な問題であり、英国でも簡単ではないようで、個々の指導医の力量で決める以外ないと思われました。しかし、英国の良い医師を育成するためのシステマティックな教育、評価法は傾聴するに値すると感じました。

最後に、当日午後は医学研究科教授会があり、十九時からは名誉教授を囲む会があったため、この講演会を開催するにあたり、教授会を十六時までに終了して下さるよう御協力頂きました。その結果として教授会の皆様方には大変慌しいスケジュールになってしまい、この場をお借りして御詫び申し上げるとともに、それでも多数ご参加頂いたことに感謝申し上げます。

平成二十一年度 解剖体慰霊祭

神経解剖・細胞組織学講座
教授　一戸紀孝

平成二十一年度の弘前大学医学部解剖体慰霊祭は、五月八日（金）の午後一時半から弘前文化センターで行われました。慰霊祭にはご遺族の方々、白菊会員の皆様においでいただき、また遠藤学長をはじめ各方面からの来賓もお迎えし、医学部医学科および保健学科の教職員と学生、総計約三百二十名が出席しました。

慰霊祭に先立って、弘前大学医学部管弦楽団と創立五十周年記念アンサンブル（指揮：新川秀一氏）による慰霊のための音楽、「今様」（作曲：斉藤高順）と「G線上のアリア」（作曲：バッハ）が演奏され参加者に感動を与えました。引き続き式に入り、御霊への黙祷の後、解剖体のご芳名が奉読され、つぎに佐藤医学部長による祭詞、学生代表（医学科三年　堤勝彦）による弔辞、代表者献花（佐藤敬医学部長、花田勝美医学部附属病院長、對馬均医学部保健学科長、遠藤正彦弘前大学長、医学科三年森礼佳、保健学科三年松田早紀、奥田稔白菊会理事長）が行われた後、花田病院長からお礼の言葉がありました。そして最後にしめやかな調べのなか参会者全員が献花を行って式を終了しました。

慰霊祭終了後、ご遺族や白菊会員の方々をも交え、医学部関係教職員は弘前市霊園にある医学部納骨および埋骨施設にお参りして献花と黙祷を行いました。好天に恵まれ、霊園の高台からみた岩木山がとても美しかったのが印象的でした。

平成二十一年度 動物慰霊祭開催される

動物実験施設長　中根明夫
（感染生体防御学講座　教授）

去る五月十九日医学部基礎講堂において、遠藤正彦学長をはじめとして、多数の教員および大学院・学部学生のご臨席のもと、平成二十一年度動物慰霊祭が行われました。慰霊祭では、まず佐藤　敬医学研究科長から祭詞をいただきました。続いて、出席者による献花が行われ、厳かな中で慰霊祭は無事終了しました。慰霊祭に引き続き記念講演が行われました。本年は皮膚科学講座澤村大輔教授に「表皮の自然免疫」と題する講演をいただきました。近年、免疫学の分野では自然免疫、特に粘膜・皮膚といった表層の免疫応答の解明が急展開していますが、これらの内容について皮膚を対象としてとてもわかりやすく講演していただきました。

さて、佐藤医学研究科長の祭詞でも述べられていましたが、一年前の本誌でも紹介しましたように、新弘前大学動物実験委員会の下、新しい規程に基づいた運用が始まっています。また、昨年十一月二十一日付で、「弘前大学動物実験に関する飼養保管マニュアル」および「弘前大学動物実験に関する安全管理マニュアル」が制定され、これまでは、実験動物の飼養・実験室等の管理基準や運用はその事情に合わせて各学部・研究科主体で行われていましたが、全学共通の基本事項を定めました。また、新規程のもと、昨年の四月から教育訓練が義務化され、一時間程度の講義をしており、これまで三百名弱の受講者がありました。医学研究科の実験計画書に氏名が記載されていながら未受講の実験実施予定者が少なからず見受けられますので、次回の教育訓練を是非受講していただきたいと思います。

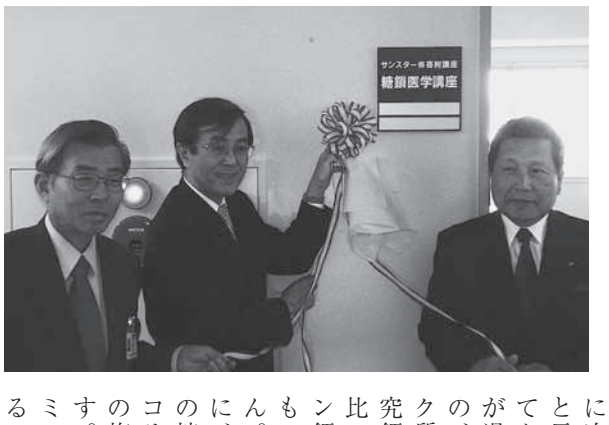
五月二十二日、第三十五回国立大学法人動物実験施設協議会総会が滋賀県大津市の琵琶湖ホテルで開催され、動物実験施設専任教員の成田浩司先生と二人で出席しました。折しも開催直前に滋賀県で新型インフルエンザ感染者が出たため、直前まで開催するかどうかの決定が延期されましたが、会場入り口での手指消毒とマスク着用の条件下で開催されました。総会の中で興味を惹いたのは、いろいろな大学動物実験施設で、動物実験施設として独自の研究・技術を生かして独り立ちの努力をしていることでした。これらの報告を聴き、私たちも動物実験施設としての研究・技術の特徴を出し、単に研究者の動物を預かり飼養する施設ではなく、動物実験をリードする中心基地にしていく努力をしていかなくてはならないと思いました。

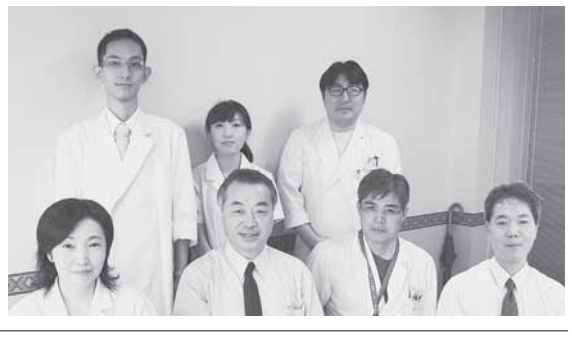
今後とも、先生方には動物実験施設に対するご理解とご協力をお願いいたします。

サンスター株式会社寄附講座「糖鎖医学講座」を設置

糖鎖医学講座　教授　中村敏也

糖鎖医学講座は、株式会社サンスターの寄附講座として平成二十一年三月三十日に弘前大学大学院医学研究科に設置されました。本講座は、大学院医学研究科附属高度先進医学研究センター糖鎖工学講座と教育・研究において連携しながら、特にプロテオグリカンとその関連物質の糖鎖生物学を教育・研究に取り込み、新しい医学研究の分野を拓くことを目的としています。スタッフは中村敏也（教授（併任）、保健学研究科医療生命科学領域）、吉原秀一（准教授（併任）、医学研究科消化器外科学講座）、須藤晋一郎（助手）、黒田喜幸（助手）、後藤昌史（客員研究員、株式会社サンスター）、加藤愛美（技能補佐員実験助手）、八木橋嘉子（事務補佐員）で構成されています。研究プロジェクトとしてプロテオグリカンとヒアルロン酸ならびにその関連化合物、特にこれら糖鎖のオリゴ糖の医学応用を目指し、研究活動を開始しました。





糖鎖が核酸、タンパク質に次ぐ「第三の生命鎖」と言われるようになってから、かなりの年月が過ぎました。その間の、いわゆる糖タンパク質および糖脂質の研究領域における進展に比べ、プロテオグリカン領域のそれは必ずしも顕著とは言えません。その原因のひとつに、プロテオグリカンの糖鎖部分であるグリコサミノグリカン構造の複雑さがあげられます。これは、グリコサミノグリカンを構成する一つ一つの糖に結合する硫酸基の数やその結合位置、あるいは糖に結合する官能基の立体的な配置の違いが、あたかもランダムに思えるほどに多様であることに起因しています。したがって、グリコサミノグリカンの構造と機能の関係の解明は、今なお不十分であるのが現状です。中にはヘパリンのように、その構造と生物活性の関係が明確な形になったものもありますが、その一方で、軟骨などに多く含まれるコンドロイチン硫酸プロテオグリカンなどでは、cDNA解析から明らかになったコアタンパク質のいくつかの機能に比べ、糖鎖部分（コンドロイチン硫酸鎖）の生物活性の報告についてはいくつか散見されるにとどまっています。したがって現在のところ、プロテオグリカンといえば、残念ながら水分保持や組織の物性維持などの物理化学的な特性が前面に出ている状況にあります。

そこで私たち糖鎖医学講座では、グリコサミノグリカンの構造をオリゴ糖レベルで解析し、その生物学的機能の探求を第一命題に掲げ、これを医学応用につなげることを目指すことからスタートしました。前途多難ではありますが、明るく仕事をするスタッフとともに、まずは三年間を邁進していきたいと思います。

何とぞよろしくお願いいたします。

平成21年度

弘前大学医学部鵬桜会総会並びに懇親会報告

社会医学講座　教授　中路重之

平成二十一年度弘前大学医学部鵬桜会総会並びに医学科三年次編入学生の歓迎を兼ねた懇親会が、平成二十一年五月三十日午後三時半より、医学部コミュニケーションセンターで行われた。決算、予算、事業計画、役員改選（理事の増員を含む）が主な議題であったが問題なく了承された。例年の懸案事項である鵬桜会会費徴収について、納入手続きを容易にするため郵便口座振込に加え、インターネットを利用した納入方法も検討しているとのことであった。最後に、医学科三年次編入生へ石戸谷忻一理事長から記念品贈呈があり、西澤一治常務理事が三年次編入生のためスライドにまとめわかりやすく鵬桜会の紹介を行った。

総会の後は同センターで懇親会が行われた。今年の特徴は、現職の教授を招待しなかったことであると石戸谷忻一理事長が述べられたが、佐藤 敬医学部長が「私も一応現職教授です」と返され、なごやかな雰囲気の中会がすすめられた。石戸谷理事長と遠藤正彦学長から医学科三年次編入生に歓迎の挨拶があり吉田豊前学長の乾杯の発声後、参加した理事、教員、学生のテーブルスピーチが続いた。石戸谷理事長は、本学は当然のこと全国どこにでも医学部鵬桜会から多くの教授を輩出したい、と熱く語られていた。三年次編入生たちは社会人を経験したものも多く、堂々として会に馴染んでいた。私は、医学部学術特別賞で鵬桜会から記念メダルと賞金をいただきそのお礼も込めて出席した。鵬桜会から寄せられる期待は大いに身に感じつつもまずは滞納した会費納入計画が先かなと自己反省しつつ、楽しいひとときを過ごせた会であった。

コラム　医学部こぼれ話…

医学科でのカリキュラム調整、内容検討をするワーキンググループにおいて、全学統一の授業日程表を用いるが、入学式、卒業式、文化祭、センター試験日という授業のできない日の確認以外あまり利用価値がない。しかも、授業開始日と終了日の日程の縛りだけがのこり、学部に必要な実習・演習を入れるために日程に無理がでてくる。その結果、学年によっては、水曜午後に授業・実習をいれたり、また、夏休みとなっている九月に、病院実習をはじめ、Early exposure、試験日程等を組み入れたりと、全学的な統一表には授業はないとされている期間に詰め込んでいるのが現状である。授業日程の全学統一表というと、単純化とわかりやすさを目的としているようだが、学部の学年毎の実状を無視し、むしろ運用面での煩雑さをひきおこし、学生にも教員にも負担をかけているだけである。学部によって必要とする単位数、実習演習の内容も量も異なるから当然のこと。本来であれば、まず学部授業の内容にそって組み立てるべきが、全学枠組みに適合させるために無駄な苦労を強いられているのはどうかと思う。

平成21年度科学研究費採択状況

採択件数が大幅増加

皮膚科学講座　教授　澤村大輔

医学研究科および附属病院における平成二十一年度の科学研究費採択状況が公表されました。まずは付表をご覧ください。平成二十年度と比較すると、採択件数では医学研究科が五十二件から六十件、附属病院が十九件から二十五件、全体では七十一件から八十五件とすごい増加が見られています。さらに、採択率もアップしていました。これに伴い交付金額も全体で一千二百万の増加が見られました。さらに、注目されるのが、申請数の増加であります。出さなければ採択されませんので、皆さんにどんどん書いていただきたいと思います。この数年来、医学研究科あげて取り組んでいる、いくつかの科研費の獲得強化プロジェクトが少しずつ効果をあげていることがわかりましたので、こちらも継続して行って、申請者を補助していただきたいと思います。

平成21年度	申請数	採択数	採択率(%)	交付額(千円)
医学研究科	174	60	34.5	158,067
附属病院	141	25	17.7	42,120
全体	315	85	27.0	200,187

平成20年度	申請数	採択数	採択率(%)	交付額(千円)
医学研究科	160	52	32.5	158,355
附属病院	127	19	15	30,035
全体	287	71	24.7	188,390

平成21年度（新規＋継続）	医学研究科	附属病院
新学術領域	2	0
特定領域	5	0
特別研究員奨励費	1	0
基盤研究S	0	0
基盤研究A	1	0
基盤研究B	7	0
基盤研究C	26	10
萌芽研究	7	0
若手研究A	0	0
若手研究B	10	12
若手研究（スタートアップ）	1	0
奨励研究	0	3
合計	60	25
総計	85	

弘前大学オープンキャンパスが開催される

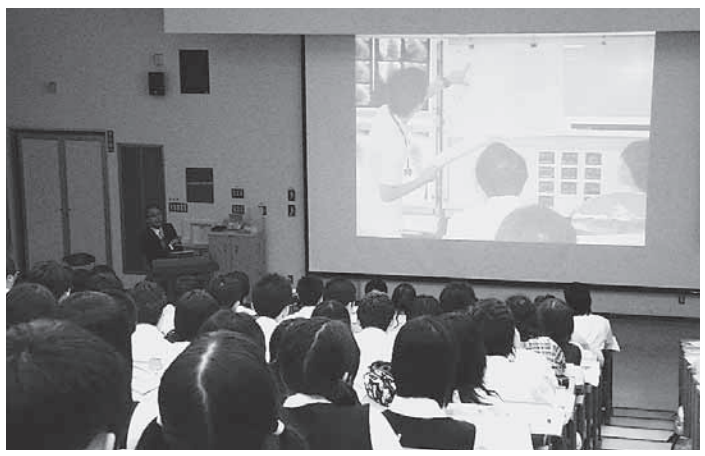
医学科入試専門委員長　中根明夫
（感染生体防御学講座　教授）

八月七日（金）に弘前大学オープンキャンパスが開催されました。八月に入り弘前大学の学生から新型インフルエンザの感染者が出たことから、開催前日に急遽新型インフルエンザ感染対策会議が開催され、オープンキャンパスの実施について検討されましたが、予定通り実施という結論になりました。当日は主催者側の教職員や学生に問診票提出が義務づけられ、参加者に対しても手指消毒をお願いし、感染予防対策を行いました。オープンキャンパスの開始前の受付時には参加者の出足が悪く、新型インフルエンザの一件があったためか、と心配しましたが、最終的に参加者三百四十五名（うち保護者・高校教諭四十五名）と、例年通りの参加者数となり、胸をなで下ろしました。大講義室は予想通り満席となり、小講義室もほぼ埋まりました。

午前十時からプログラムが開始しました。まずは佐藤 敬医学部長から、オープンキャンパスへの参加の歓迎と弘前大学医学部医学科への誘いの挨拶がありました。次に、奥村 謙学務副委員長から弘前大学医学部医学科の特徴ある研究・教育についての紹介、引き続いて「心臓病治療の進歩」と題した模擬講義が行われました。心臓の解剖生理学から始まり、最新の心臓疾患の治療まで、四十分間の奥村教授の話に参加者は聴き入っていました。その後一転リラックスした「学生コーナー」が始まりました。医学科一年生、三年生、四年生の学生諸君に「学生生活を百倍くらい楽しむ方法」と題し、楽しく、かつためになる学生生活を語ってもらいました。昼食後、青森県から山中朋子先生に来ていただき、「医学修学資金貸与制度について」という題でお話しをいただきました。引き続いて施設見学のプログラムです。まず参加者全員に大講義室で福田幾夫胸部心臓血管外科学講座教授と山内早苗医師の解説のもとに手術ビデオが放映されました。これは毎年もっとも人気のあるプログラムです。生徒達の興味半分から真剣なまなざしに変わっていく様は、福田教授や山内医師のプレゼンテーションの魅力によるものが大きいと思います。最後に薬剤部、検査部、放射線部の三施設の施設見学が行われました。施設見学と並行して、午後一時半に在校生と見学者との意見交換会が行われ、医学科のオープンキャンパスが閉幕しました。今年も参加者は、県内、東北各地のみならず、全国から参加者が集まりました。

ここ三年ほど、学生有志にお願いして、「学生コーナー」を担当してもらいましたが、今年は学生自治会に協力を求め、受付時の誘導、施設見学の付き添いも担当してもらい、参加した生徒と医学科学生のふれあいの時間が増しました。

最後に、今回のオープンキャンパスの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方、学生十一名、学務グループに、深く感謝いたします。



「ヒロダイ・いきいき元気塾」活動報告

社会医学講座　助教　檀上和真

「岩木健康増進プロジェクト」をはじめ私たちが社会医学センター（社会医学講座）で行っている地域保健活動には大きな悩みがあります。それは、この活動に参加していただける方の多くは「健康に関心のある」皆さんであり、健康に問題のある皆さんにはなかなか参加していただけないという現実です。全住民の健康度を上げるという大目的のためには何とかして乗り越えたい壁であります。

このような大きな悩みが背景にあり、私たちは昨年七月より「ヒロダイ・いきいき元気塾」を始めさせていただきました。本塾には、健康講演会を軸とした「健康講演会」と健康やスポーツに関する実技や体験等を実践することを軸とした「健康スポーツ講習会」があります。平成二十年度は健康講演会を二回、健康スポーツ講習会を十三回開催することができました。参加者は健康講演会に約百七十名、健康スポーツ講習会に約九百四十名で合計千百名以上にのぼりました。

その趣旨からして、本塾はより多く、幅広い年代の皆さんと接触することを目指しています。昨年度千百人以上の皆さんのご参加をいただけたことは、その意味では何よりもの収穫でした。幅広い年代の皆さんのご参加を得るために、佐藤弘道さん（元「NHK体操のお兄さん」）による「健康のための親子体操」や瀬尾京子さん（バルセロナオリンピック体操競技代表）による「体操健康教室」を行いました。前者では幼児とそのお母さん、後者では小学生が対象でした。どちらも大変好評でした。加えて、数回行った健康チェック実践教室にはたくさんの高齢者の方にご参加いただきました。

今年度も本塾はすでに開催されています。手始めとして、平成二十一年六月二十八日岩木海洋センターで弘前大学教育学部教授の戸塚　学先生を講師に迎え、ストックウォーキング教室を開催しました。参加者は約三十名でした。はじめにストックウォーキングについての説明がありました。①ストックウォーキングは、子どもから高齢者まで一年を通して屋外で安全にできる歩行であること。②二本のストックを使うため、膝・腰への負担が少なく、また、消費カロリーも通常歩行の一―二割程度増加する。この二点を中心にスライドを使用してわかりやすく説明していただきました。

その後、ストックを使用してのストックウォーキング実践練習を行いました。はじめのうちは参加者もストックの使い方に困惑した表情でした。しかし、次第にストックの使い方にも慣れると、通常のウォーキングと異なり体が自然に進むような感覚を実感しておられました。当日は気温が約三十度にもなる真夏日でストックウォーキングに適した状態とは言えませんでしたが、一時間程度の実践練習は参加者にとっては短く感じられたようでした。

大学の人間として本塾を開催していつも思うことがあります。それは私たちの活動は住民の皆さんとの心の触れ合いなしには成り立たないということです。参加者の皆さんの笑顔と充実感から私たちはいつも明日への意欲と喜びをいただいています。今後も「ヒロダイ・いきいき元気塾」は様々な企画を考えています。興味がおありの方はぜひご参加ください。

平成20年度　「ヒロダイ・いきいき元気塾」活動報告

健康講演会

日　程	タイトル	講　師	参加者
平成20年７月２日	医師不足の実態とその対策について	**本田　宏**（済生会栗橋病院副院長）	約80名
平成21年２月５日	日本の医療の今、そして明日	**熊坂義裕**（岩手県宮古市長）	約90名

健康スポーツ講習会

日　程	タイトル	講　師	参加者
平成20年10月29日	健康のための親子体操	**佐藤弘道**（元ＮＨＫ体操のお兄さん）	約350名
平成20年７月14日	柔道教室	**田辺　勝**（日本体育大学女子柔道部監督・全日本柔道連盟女子ナショナルチームコーチ）	約100名（２回合計）
平成20年12月４日		**小嶋新太**（日本体育大学男子柔道部監督・全日本柔道連盟男子ジュニア強化担当コーチ）	
平成21年２月12日	体操健康教室	**瀬尾京子**（バルセロナオリンピック代表）	約40名
平成20年９月９日	健康チェック実践教室	社会医学センタースタッフ	約450名
（他８回）	（公民館、津軽中学校等）		

社団法人　青森医学振興会

沿　革　平成11年3月1日　弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足（任意団体）
平成13年4月2日　社団法人青森医学振興会設立許可（青森県）

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようと次の事業を行っております。

○医学教育の助成	教育活動を活性化するための支援
○医学研究の助成	研究活動を高度化するための支援
○地域医療振興事業の助成	地域医療に貢献するための支援
○医学国際交流の助成	国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会			
口　座	青森銀行　弘前支店　普通　1087485 みちのく銀行　大学病院前支店　普通　0198579 ゆうちょ銀行振替（旧 郵便振替）　02200ー4ー57580		※　各銀行の本支店及びゆうちょ銀行から振込む場合は、手数料無料です。	
会　費	会員種別	年会費	お振り込みいただく場合は、お手数ですが、振興会事務局までご連絡（電話、メール）願います。	
	医学部教員	1万円		
	医学部卒業生	2万円		
	賛同する個人	1万円		
	賛同する団体	10万円		

お問い合わせ　TEL：0172（33）5111内線6519　E-mail：jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学後援会のご案内

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部総務課広報・支援グループ（Tel：0172-39-3012、E-mail：jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp）までご連絡いただくか、弘前大学後援会ホームページ（http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html）をご覧ください。

人事異動

●大学院医学研究科

採用（21・7・1）
循環呼吸腎臓内科学講座　助教　櫛引　基〈国立療養所松丘保養園〉
腫瘍内科学講座　助教　石黒　敦〈附属病院医員〉
小児科学講座　助教　工藤　耕〈附属病院病院助手〉

辞職（21・6・30）
循環呼吸腎臓内科学講座　助教　及川　広一〈むつ総合病院〉
小児科学講座　助教　鈴木　康一

採用（21・8・1）
泌尿器科学講座　助教　工藤　茂将〈むつ総合病院〉

●お知らせ●

医学部ウォーカーへ教授就任のご挨拶を掲載いただける方は、弘前大学医学研究科総務グループ（総務担当）までご連絡願います（0172-39-5194）。ただし、紙面の都合により掲載ができない場合もございますので、あらかじめご了承願います。

編集後記

一九七〇年代にはあれほどひどかった河川の汚染も（頷いている方は四十歳以降？）、下水道整備を含めた様々な環境対策が功を奏し、多くの川にさかなが戻ってきています。また、乱獲がたたって減少した漁獲量も、操業制限や稚魚の放流など、時には痛みを伴う地道な努力が報われて次第に増えているものもあるようです。はたはたやサケなどが良い例でしょう。以前、ある先輩から鰺ヶ沢のサケの遡上の話を伺ったことがあります。川が奇麗になったのでしょうか、数は増えているようです。産卵前の少し赤く色づいたサケが、群をなし街中の浅い川を必死に遡上して産卵する様子は、いのちの営みそのもので、何回見ても感動がこみあげ、一日中見ていても飽きないそうです。皆さんも一度ご覧になってみてはいかが。

さて、ある地方都市の医学部教授から、「最近、科によっては医師が大学に戻ってきている」という話を伺いました。川が奇麗になったのか？エサは豊富とは言えないにしても、稚魚が成長する環境としての良さが見直されてきているのでしょう。Common disease に対する診療経験を大学で多く積むことは「不可能」とまで言われてきたことも、診療・医育ネットワーク形成や高度救命救急センターの設置によって改善の方向へ向かおうとしています。

医学部の定員も急増します。あと数年しますと、放流される稚魚の数は確実に増えます。遡上するサケも増えるでしょう。そうなる前にもっと川をきれいにしておきたいものです。

さて、今年の秋は鰺ヶ沢にサケの遡上を見に行って見ようかな。（袴田）

・医学部ウォーカー第49号において，一部誤りがありましたので訂正いたします。関係者および読者の皆様にお詫び申し上げます。

第49号　８ページ
弘前大学医学部臨床教授・准教授称号付与者　臨床准教授

正　新戸部泰輔（五所川原市立西北中央病院整形外科部長）
誤　新渡戸泰輔（　〃　）